

対人恐怖症における対自と対他

鈴木 睦 夫

序

土居(1960)によれば、神経症者(特に森田の「神経質」にあたるもの)は、治療過程の中で、それまで「自分」がなかった状態に気付く、新たに「自分」の表象をもつようになるということである。土居に限らず、神経症者の「自分」のなさば諸家が指摘しているところである。鏑(1974)は自我同一性の観点から「自分」喪失感について論じている。神経症者においては対自の上で何らかの問題があるということは、筆者の浅い臨床経験からも推測がつく。しかし対自と同時に対他の上でも問題がないわけではない。神経症者にはほぼ共通してうかがわれるのは、人にどう思われただろうか、と人にみられる自分を気にすることである。神経症といえなくても、神経症的になることは、このように人にみられる自分というものに過度に敏感になることであるという感じさえ筆者はもっている。ところで、人にどう思われただろうか、悪く思われなかっただろうかというような意識は、対自と対他のどちらの関係上の問題であるかと二者択一的に問われれば、返答に窮するであろう。どちらでもあると言わざるをえまい。このように少し考えてみただけでも、対自と対他の両関係は切り離せないことがわかる。

さて神経症の対自および対他関係は、人にみられる自分が気になるという意識に要約されるのではないかと筆者は考えるわけだが、「人にみられる」ことは、人にあれこれ観念的に思われるということだけを意味するのではなく、症例によっては、それは文字通り直接的・感覚的な、人に見られている意識であり、その苦しい意識が一つの症状となっている。それが対人恐怖症の中に含まれる視線恐怖症だが、笠原・

藤縄ら(1972)は、視線恐怖症の中からさらに、「他人に見られる」恐怖より「他人を見てしまう」恐怖がまさっている例をとり出し、それらを「自己視線恐怖症」と名付けている。彼等によれば、それらは対人恐怖症の中でも重度のものであるということである。「加害恐怖」的(山下 1970)であることと重度ということとは何か関係があるのだろうか。それはとにかく筆者は、神経症者の対自および対他関係を究明するには、対自および対他関係そのものが症状になっている対人恐怖症をとりあげるのがよいのではないかという観点から、また対人恐怖症の中でも重度のものと軽度のものとは、対自および対他関係にどのような違いがあるかという疑問から、ここでは自己視線恐怖症と赤面恐怖症をとりあげ、考察することにする。前者は、それが自己臭恐怖症と同様に加害恐怖的であり、重度であるという理由でとりあげ、「視線恐怖」ということに特に力点はおかれていない。赤面恐怖症は一概に軽度の対人恐怖症とはいえないだろうが、森田の「神経質」に含められるような例を借りて考察する。これらを一応別個に考察したのち、対人恐怖者における対自と対他の両関係の関係について一般的な考察を試みるつもりである。

I 自己視線恐怖症について

まず以下に筆者がもった症例を掲げる。

症例 Y子 女 20才

高校一年生の時の担任教師が、わざと自分をじっと見つめた。自分に何かおかしいところがあるのかと思った。以来何かにつけその教師が自分に含むところのある振舞をしているように思った。彼がクラスの者に「目は心の窓」といった時、自分に対するあてつけみたいなきこ

え、以後目のことが気になりだした。一点をみていると周囲のものがみえてきてしまう。また自分の目つきによって他の教師達も授業がしにくくなるようだった。

彼女はひとを前にしている時、自分がどんな顔になったかわかる、他人にいわれたことはないけど、自分がいやな目つきをしていることが、周りの人の表情でわかる、と断言する。また自分がいることによって相手が胃を悪くすると確信している。周りが見えすぎ、また自分の目が及ぼす影響を考えて、かなり分厚い遠視鏡をかけることもした。

彼女は数度職場を変えているが、その都度よい上司ばかりに巡り合い、一生懸命尽くしてやりたいと思うが、「ひとをいしきする」症状のために、尽くしてやれないもどかしさと申しわけなさを訴える。総じて自責の念が強い。いしきする度合は、自分が、よい人だと思う人に対して強く、「どうしてもよいような人」にはそれほどでもない。

彼女は、自分自身を、他人をすぐ信用する性質で、他人をよい方に、よい方に解釈する人間だとみなしている。他方彼女が、かつての担任教師その他の人物を批判する口調はかなり手きびしく、強い憎悪がこめられているようにも感じられる。

発症前の性格は、明朗で協調性のある性格だった。母親から環境に染まり易い、友達に左右され易いといわれたことがあった。しかし他人の悪いと思った点は、ズバリと指摘してはばからなかった。現在は症状のために、他人に強く出られない。また彼女は、内面を顔にあらわすまいとする自尊心の強さもあったようである。同僚からは何の悩みもなく、無邪気でいいといわれている。症状のことは誰にも明かしていない。

筆者と面接中の彼女は、自分の言わんとすることを明瞭に伝えられない困惑を示した。内部的にかなり混乱しているようだった。他方筆者の言葉も彼女の内部に届きにくいという感じも

もった。

以上、Y子の生育歴や治療経過などはすべて省略し、病像のエッセンスと思われるものだけを提示するにとどめたが、その理由は、筆者の意図が所謂事例研究にはないからである。筆者は、上の症例を借り、また他の研究者達の症例を参考にして、自己視線恐怖症についての一般的、理論的考察を試みようというものである。

さて上の症例に認められ、他の自己視線恐怖症にも共通して認められる基本的な心理的事実は、まず自分自身がどこか異様で、他人に悪影響を及ぼしているという感じをはば確信に近い形で抱いているということである（上の症例では妄想といってもよいであろう）。そしてそのような感じを抱くに至ったのは、実際に言葉で人に指摘されたからかといえそうでないことも共通した事実である。たとえ病者が、ひとにおかしいといわれたと言っても、問い詰めれば、彼の陳述はあいまいなものにならざるをえない（柴田 1975）。

ひとから実際に指摘されたわけではないというこの事実は重要な点である。ところでひとから指摘されることはないが、自分の方から自分はおかしいか、迷惑をかけているのではないかと尋ねることは勿論病者にとって思いもよらないことである。なぜ思いもよらないことかと問えば、病者は、ひとは自分のことを気遣って本当のことを言ってくれはしまいだろうから、と答えるだろう。もっともだといわざるをえないが、もっともらしさが、真の理由を隠すのではないか。笠原・藤縄ら（1972）が指摘しているように、病者の一種の万能感は容易にみとれるところである。病者が、自分はどこかおかしくて、人に悪影響を及ぼしているのではないかと相手に問うことは、たとえ否定的にしろ、自分を過大視していることを明らかにしてしまうことである。つまりそのときこそ真におかしい人間だと思われるのである。彼にはその予感があって、ひとに尋ねられないのだと思われる。ということは彼自身、狂気に足を踏み

込んでいることをどこかで知っているということである。狂気に直面させられるのは恐ろしいし、自己過大視も捨てたくないから（両者は同じことになるのかもしれない）、病者は人に尋ねられないのだといえると思う。彼は自分が狂気でないことの証拠を得ようとして（自己の過大視を捨てまいとして）、自分の抱いている観念の事実性を、他者の表情・態度の微細な変化に読みとろうとするのである。しかし彼のこのような自己の狂気の反証を得ようとする努力が、反って狂気を重らせていくという逆説的結果になるのは明らかである。自分の観念の事実性を突きとめ、狂気の反証を積み重ね積むほど（積んだと思うほど）、彼は狂気に閉じこめられる。彼が、「あなたの視線は特に異様ではありませんよ」（あるいはそれが自己臭恐怖者の場合には「あなたにはおいませんよ」という治療者やその他の人の言葉を容易に信じられないのは、それを信ぜれば、それまで積み上げてきた、自己の狂気の反証が一気に崩れてしまい、自分が狂気であったことを認めなければならないからであるといえよう。

ところでこれまで視線恐怖者について述べてきたことは（あるいは自己臭恐怖者についても同じことがいえると思うが）、事態の一面だけを浮き彫りにしたという反論もあろう。筆者は、病者が他者の表情・態度の微細な変化に敏感であるのは、自分が抱いている観念の事実性、すなわち狂気の反証を得ようとしてのことだと言ったが、病者は、たとえ自分の視線が異様で、他者に悪影響を及ぼすことについての確証を得たと信じたとしても、それで彼の心は晴れるわけではない。確証を得たら得たで、そうしたおかしな自分について悩むのである。しかしこれは出発点に戻ってきたこと、最初の意図を達成したということに過ぎないことは明らかであろう。問題は病者のネガティブな万能感にある。病者が万能感をもち、他方その万能性が、他者を害するという万能性で、そのため彼を多幸的にさせないで、反対に悩ませるというこ

とには何か不思議なからくりがあるように思われる。

さて次に病者の悩みの性質に目を転じてみよう。一般にもし自分の事実上の欠陥であれば、人は悩むであろうが、どうにもならないものとして耐えることを学んでいくであろう。例えば失明した者は、その失明の事実をどうしようもなく、耐え難いが耐えなければならないものとして生きていくことを学ぶであろう。たとえ人に自分の苦しみを理解してもらい、苦しみが軽減されることはあるにしても、所詮自分一個の問題であるという自覚には変りないだろう。ところで自己視線恐怖者のような病者は、何を求めて治療者のもとへ赴くのだろう。まずその若しみが大きいことが考えられる。実際その苦しみは、自殺を願うほど耐え難いものである場合がある。誰にも容易に打ち明けられる悩みではないから、軽減されることはなく、積もる悩みを抱えて止むなく精神科医あるいは心理療法家を訪れるということは考えられることである。しかし病者の現実的苦痛は認めざるをえないにしても、その苦痛には、上で例にあげたような、失明に伴う苦痛とは異なったものがありそうである。失明は事実であるが、病者の視線の異様さ、他人への悪影響といったものは客観的事実ではない。しかし病者は、それが事実であるか否かということがわからなくて、そのことの故に苦しむのではない。病者は自分の異様さ、悪影響を確信していさえする。彼にとっては事実なのである。では失明という事実と病者にとっての事実とでは、後者の方が耐え難いのか。それならその理由は何か。失明は失明した当人一個人のことであるが、病者の場合には他人を巻き添えにするからか。——なかなか病者の苦痛の実体を捉えることは難しい。別な観点に立ってみよう。病者の現実的苦痛がいかに大きなものであろうと、なんといっても彼の信じている自己の視線の異様さ、悪影響は、客観的事実ではない。彼自身はそれを確信しているが、できるものならそれから解放されたいと願

っていることも認めなければならない（先述した、自己過大視を捨てたがらない、ということと矛盾しているようであるが）。それなら彼は治療者の、彼の抱いている観念を否定する言葉を信ずることだろう。ここにおいて他人を真に信ずることと病から癒える（少くとも症状から解放される）こととは一つになるといえる。だが病者は治療者の言葉さえも信ずることができない。ということは、病者の治りたいという願いは本物ではないということである。病者は、信じたいが信じられないのだと抗弁するかもしれないが、ここで「信じる」という言葉の不思議さにうたれる。それは、信じられうる保証があって信じられるのではないということである。信じられないというのは信じようとしないうことだといわなければならない。病者は他人を信じることより、自己過大視を捨てないことを選んでいるのである。

ところでまた先程の考察の出発点に戻ってみよう。病者は自己の視線の異様さ、人への悪影響を確信しているが、また、普通の人のようになりたいと思っている（自己視線恐怖者に限らず、症状に苦しむすべての病者は「ただ普通になりたいのです」と言うといって過言ではないだろう）。しかし自分がおかしいのを確信しているのに、そうでなくなりたいとあがくのはおかしくはないか。たとえば前にあげた失明した人の例で考えてみると、彼は、目が見えたらどんなにいいだろうと想像することはあるかもしれないが、それが空想であるということはちゃんと知っているだろう。そして自分が盲人でなくなろうとあがきなどしないであろう（手術による回復可能な場合は勿論別である。）この意味で、彼には自分の失明は肚にはいった事実である。しかし病者の場合どうだろう。おかしい自分でありたくないというあがくのは、彼の、自分はおかしいという確信が偽りのものであるからだといわなければならないだろう。つまり彼は確信しているようであるが確信しきれていないのである。確信しきれないとは、自分を信じられ

ないということに他なるまい。

以上のように、病者は自分を信じられないし、さりとて（それゆえ）他人も信じられない状態にあるといえる。そしてこのような状態にあることこそ、病者の大きな苦痛の因ってきた源ではないかと推測される。

さて筆者は上で、病者は他人を信じようとしれないと言ったが、ある意味では他人を信じ、甘えているということもいえるのではないかと思う。このことについて考えてみる。

病者は、陰で人が自分のことをおかしいと思っていると猜疑心を働かせるかもしれないが、面と向かって「あなたはおかしい」と言われることは全く予期してまいと思う。彼自身はその理由を、たとえ自分がおかしくても、人は自分のことを気遣って本当のことは言ってくれないだろうからだ、と説明するかもしれない。しかし他方彼がおかしいことは事実でないから、人がそういうことはありえないのである。（筆者は、自己視線恐怖にしろ、自己臭恐怖にしろ、醜貌恐怖にしろ、病者が事実と反することについて悩むことは重要だと思う。あえて事実でないことを選んでいくという感さえしないこともない。常人以上の容貌をもった醜貌恐怖者の例も身近にきいたことがある。）病者は自分が悩んでいるものが事実でないこと、それ故他者から、あなたはおかしい、と言われることはないということを、どこかで知っているのではないか。もしそれなら、他者に真実を語ってくれることを要求しながら、その実、他者が真実を語れば語るほど、誰も真実を言ってくれないと人間不信を打ち出すことができることになる。ここに巧妙な仕組みを感じるのは、ゆき過ぎだろうか。しかし意識的に仕組まれたのではないにしろ、実際の事態はまさしくそうになっている。ところで、ここで病者が上述のように振舞うためには、他者が真実を語るだろうとどこかで知っていることが必要であるのに気付く。すなわち他者の誠実を当て込み、それに甘えているのである。なぜそれが甘えかというと、他

者に過大な要求をしているからである。大抵の人は、自分の言葉が何ら役に立たない相手を見限ってしまうだろう。自分はおかしいのだと言いつけることができるために他者を必要とする病者が、他者に見放されてしまう結果になるのは皮肉なことだ。このどうにもならなさも病者の現実的苦痛にかかっていることであろう。ところで上で筆者は、病者は他者(例えば治療者)に甘えていると言ったが、これは実際に病者に会っている時の印象と反するように思われる。筆者の掲げた症例のY子においても、いわゆる甘えの感じは受けなかった。むしろ筆者の言葉が内部に届きにくい一種の強情さを感じた。しかし病者に、ある種の甘えにみられる、ベタベタした感じとか、依存的な感じが認められなくても、病者は上に述べたようなことから、「甘え」の本義に照らして(木村(1972)によれば、「甘え」の本義は、「なにをしても許されるという馴れ馴れしい気持ちの上からしたい放題の振舞をすること」である。)、甘えているといわなければならない。

さて、これまで自己視線恐怖者の対自および対他の関係に焦点をあてて考察してきたが、それらは非常に複雑な様相を呈しているといわなければならない。それ故これまで述べてきたことを要約するのは難かしいのであるが、病者が自己過大視を捨てようとしないうこと、そのことと他者を信じようとしないうこととは一つのことであるように思われること、病者は他者を信じられないと同時に、自分をも信じられないこと、しかし他方どこかで他者を信じ、甘えているように思われることなどを言っておこう。

II 赤面恐怖症について

今度は自己視線恐怖症より軽度な神経症である赤面恐怖症について、そこでは対自および対他の関係はどうなっているか、一応これまでの考察とは別個に考察してみたい。まず以下に症例を掲げるが、すでにIで述べた理由で、病像のエッセンスだけをごく簡単に述べるにとどめ

る。^{注1}

症例 Z子 女 23才

男性の前で顔が赤くなる。恥ずかしい時赤くなるのなら構わないが、赤くなる必要のないような相手に対し赤くなるのがいやである。気がないのに気があると思われるのがいやである。赤面する傾向は中学生の頃よりあった。男子生徒と話すとき赤くなった。しかし赤面が特に気になりだしたのは最近である。顔が赤くなると思うと、それだけで男性を前にしなくても赤くなる。日頃あまり話を交わさない男性を前にした時、最も赤面が気になる。以前は赤面のことを口外していたが、この頃は言えない。赤面を人に指摘されたことはない。性格に関しては、小学生時代通知簿に消極的と書かれたが、無理に積極的になろうとした。かつては友達に同調し易かったが、今は自己を主張しすぎるくらいである。ひとの悪口を言う人を絶対拒否する。他人には明かるく活発な人間にみられている。神経質なところもあって、高校生の頃癌恐怖のために医者まわった。

上の例でもわかるように、赤面することだけでは赤面恐怖症といえないのは明らかである。赤面にこだわり、ついには赤面の恐れによって赤面してしまうということがなければならぬ。もっとも多く赤面恐怖者は、上の例もそうだが、特に赤面を意識し出す前から赤面し易い傾向があるようである。少くとも内気とか恥ずかしがりの傾向は認められるようである(西園 1956, 鈴木(謙) 1959, 石福 1964)。赤面し易い傾向と赤面にこだわることが、果たして、対人恐怖者にしばしば指摘される2つの相反した心性、弱気と強気(三好 1970, 内山 1974)にそれぞれ対応する、互いに別個のものであるか否かということも問題だと思いが、それは今は措くとして。

赤面にこだわることは、単に赤面を恥ずかしがることではない。内山(1974)も言うように、病者においては、赤面は「恥辱」になっているとみることができる。では赤面は如何なる理由

で恥とみなされるのか。赤面は小心のしるしでもある。しかしそれだけではない。先に掲げたZ子の例を、小心を恥に思う心からだけでは説明しきれまい。赤面とは何か。というより人は赤面にどんな意味を付与するか。もし我々がある人の赤面をみたら、その人が我々あるいはその他の相手を意識していること、すなわち自分と相手との何らかの特殊な関係付けを推測してよい。Z子も人が一般にそんな見方をするだろうという仮定の下に、赤面をいやがっているのである。だが赤面においては、自分と相手との何らかの特殊な関係付けが生じているにせよ、関係付けが即ち赤面なのではない。特殊な関係付けの羞恥が赤面なのである。相手と自分を特殊に関係付けるほどに自分を買い被ることの羞恥が赤面であると筆者は考える。赤面を恥ずるとは先述のように、意識していると相手に思われるのをいやがるということだが、より正確に言えば、自分を買い被りすぎていると思われることをいやがるということになろう。それは、自分を買い被っていると思われたらどうしようという恐れを伴うが、反面プライドでもある。Z子の場合では、彼女が赤くなることによって、相手の男性が、自分に気があると思う（と彼女は思う）。彼が彼女に好意を抱いていない場合、彼は彼女のことを、この女は自分を何と思っているのだろうと思う。彼女はそう思われるのがいやで、私は自惚れてなんかいませんよ、と言いたいのである。これがプライドであるのと言うまでもないであろう。

さてすぐ上で恐れとプライドとの関係を示唆したが、プライドの裏には恐れがある（あるいはその逆）ということは見逃せない事実である。Frankl, V. E. の言うように、恐れが恐れの対象（赤面などの症状）を現実化するのである。ところでプライドと恐れは、病者がこだわっている症状に関してのみ云々できるのではなく、広く病者の心性をなしていると思われる。

上掲の例のZ子は、ひとの悪口を言う人は絶対拒否する、と極端に潔癖なところをみせる。

また赤面恐怖ではないが、やはり対人恐怖的症状を伴った一女性A（鈴木 1973）は、仲間達が別な仲間のうわさをしている場に居合わせ、もし自分がうわさになっている仲間と同じようにうわさされたらと思うと、いたたまれなくなったと言う。Z子の場合、悪口を言う人を拒否するとは、自分が悪口を言われることを拒否するということでもあろう。Aの場合にも、自分がうわさされる辛さに耐えかねて、ひとに悪く思われぬようにすることがみてとれる。Z子の場合と異なり、恐れが先に立っているが、ひとに悪くいわれることの拒否には違いない。ところでひとに悪くいわれることの拒否は、自分もひとのうわさにのぼりうる人間であるとする、自己を相対化する視点を欠いていることを意味する。これを自己中心化といっても、自己絶対化といってもいいが、しばしば病者にきかれる、「自分が一番…（劣っている）…」とか「自分だけが……」とかの言葉は、そのような自己中心化、自己絶対化の反映とみられよう。ある赤面恐怖者は、職場で盗難が発生した時、自分が疑われるのではないかと恐怖し、赤面したのをきっかけに発症しているが（石福 1964）、これにも基盤には自己相対視の欠如があるとしなければならない。

さて自己相対化の観点を失うことは、また、必然的に他者に支配されることを招く。ある人に批判されまい、然々の人間に思われまいとするには、その人の物の見方や価値観を知って、それにそって行動しなければならないからである。自己を相対視しえない者にとって、自分がどうであるかということより、是々の見方をする人間がいるということの方が重要なのである。Z子の例のように、人が一般に赤面を「気がある」証拠とみなすならば、自分は気があるのかないのかということの方はなおざりにし、赤面して「気がある」とみられないことの方を先にするのである。病者にとって、皆が皆ある見方をするわけではないということは、慰めにならないかもしれない。しかし、そういう見方をす

る人間もいるのだからという彼の理屈は奇妙な暗礁に乗りあがるようだ。まずそういう見方をする人間をよしとするか否か判断を迫られれば、よしとしないとする（大抵否定的な意地の悪い見方をする人間が問題とされている）。それでもまだ、そういう見方をする人間が少くとも一人はいるのではないかという考えが彼を慰めないでしょう。だがここで彼は、そういう見方をしているのは、実は自分ではないか、少くとも自分はそういう見方で人をみている、ということに気付かざるをえない。とすれば、恐れているのは自分自身で、しかもその自分をよしと判断しえないという奇妙なことになる。

さて最後に次のことを示唆しておきたい。赤面恐怖者の赤面は、広く病者の心性をなしているプライドと恐れが、特に強くそこに集中しているところのもののだが、赤面の恐れがすでに述べたように、自分を買い被りすぎていると思われることの恐れなら、この恐れには、何か特別の意味があるのかもしれない。

Ⅲ 対人恐怖症における対自と対他

これまでのところ、Ⅰでは病者の奇妙な自己過大視が指摘された。しかしそれは病者にとって意識され難いものである。自責的になっている病者にとって、自己を過大視しているといわれても、まるで反対のことをいわれているような気がするかもしれない。ここでは自己過大視は、容易に意識されないように巧妙に仕組まれているといえる。

Ⅱにおいても筆者は、病者の自己相対視の拒否を指摘した。ひとに批判されたり、叱られたりしても、本来自己はそれによってどうなるわけでもない。それを恐れるとは、自分も批判されたり、叱られたりする一介の人間であると思ひ知らされることを恐れることだと考えられる。ユングの自伝に、「私」が叱られることがありうることの驚きと怒りの経験について述べた箇所がある。例えば人から批判されず、賞賛のみを得てきた「よい子」には、自己を相対化

する観点が失われていくのではないだろうかと思われる（鈴木 1973）。

さてⅠにおいては、自己過大視の他に、他者（特に病者が悩みを打ち明ける治療者）への甘へが指摘された。病者が、自分の視線が異様に人に悪影響を及ぼすと言いつけうするためには、他者が必要なのである。他者が病者の抱えている観念を打ち消せば打ち消すほど、病者は自分がおかしいのが事実だからよい人（人）は本当のことはいえないのだ、と自分の観念を守り続けることができる。他者は病者を必要としていなくても、病者は他者を必要としているのだ。

他方Ⅱにおいても、自己相対視を拒否したこと故の、他者への隷属が指摘された。人からとやかく批判されないことで、自己の存立を保つためには、自己主張を抑え、迎合的になることが必要だ。神経症者における配慮とはこのようなものだと思われる。近藤（1970）は、対人恐怖症を、「自己主張的要請」と「配慮的要請」という2つの要請の矛盾、葛藤によって説明しているが、後者は「よく思われ（好かれ）なければならぬ」という心性であるとされている。「配慮」といっても、実は自分が好かれていたいということなのだ。ところで「好かれない」は必ずしも愛情欲求ではない。世には、悪意による残酷な認識というものがある。「好かれていない」ことは、そうしたきびしい他者の目から自分を守る保身の策でもある。だから「好かれない」には特に積極的なものは含まれていないともいえる。では近藤のいうもう1つの要請、「自己主張要請」は、この点についてどうだろうか。彼によれば、それは「優越しなければならぬ」という心性である。彼は、それが真の自己主張であるかは疑問だが、自己主張を必要とするので、そう名付けたのだといっている。しかし優越するためには必ずしも自己主張を必要としない。むしろ自己主張を抑えた人が、優越した有徳の士とされることもあるのである（少くとも我国の社会においては）。もともと近藤の「自己主張的要請」は、森田の「劣等のものと

思われず、偉いものに思われたい」という、対人恐怖者の心性を指摘した言葉から導かれたものようであり、森田の言葉からは、人に然々に思われる自分が問題になっていることがわかる。自己主張を必要とするか否かは別にして（筆者も病者の自己主張の欲求は認めるが、それについては今は措いておく）、近藤のいう「自己主張的要請」は、「配慮的要請」とともに、病者の他者に重心がおかれた（Horney 1966）存在様式を表わしているとみられる。そしてこの要請は矛盾しているのではなく、一方（「自己主張的要請」）が、より多く望んでいるにすぎないのだとみられる。

さて自己視線恐怖者における自己過大視と他者の存在の必要性、あるいは赤面恐怖者における自己相対視の拒否と他者への隷属とは、相互に密接に関係しあっていることは、これまでのことからわかるが、一見正反対にみえるものが相互に結びつかざるをえない必然性をどのように理解したらいいのか。病者においては、自己とは何か、他者とは何かと改めて問わねばならない。

筆者はこれまで、自己視線恐怖者の自己過大視をいい、赤面恐怖者の自己相対視の拒否（これも自己過大視といえる）をいつてきたが、必ずしもそれらに当人の非倫理的意志が働いているとみるわけではない。病者のおかれている状態を結果的にみれば、そういうことがいえるのだということである。たとえば、ある者がある時自信を失い、不安定になり、人が自分のことをうわさしているのではないかと猜疑心を働かせたり、人の言葉を自分に対するあてつけのようにとったりして、すべてを自分に関係付けて考える場合を考えてみる。この場合、彼はある意味で、自分を肥大させているといえるだろう。しかし奇妙なことに、いわゆる自信を失った時にそうした現象が起こるのである。また他者にみられ、思われている自分というものにとられざるをえないのである。自己視線恐怖者あるいは赤面恐怖者について筆者がいった自己

過大視とは、そのようなものであり、同じ事態を含んでいる。それはⅠで掲げた症例からもみてとれるであろう。Y子は、ふとした「自分はおかしいのか」という、自分に対する疑惑から、病にのめりこんでいってしまうのである。

上述のような一種の自我肥大において、病者の他者意識は過敏になるのだが、それは真に他者に触れていることではないのは明らかである。Y子の「ひとをいしきする」は、あくまで他人にみられる自分を意識することであり、他者自体とは関係がないというべきである。Y子の場合に限らず、人に然々に思われているのではないかと推測する場合にも同じことがいえる。病者は、他者にみられ、思われる自分を知ろうとして、他者の中に侵入していくが、ある膜を隔ててどうしても他者に触れることができない。他者を侵し、侵されるほど自分と他者の境界は弱められているのに、またどうしても他者に触れられないほどその境界は絶対であるといえるような事態が考えられる。例えば、自己視線恐怖者の、他人を前にした時の状態を想像してみればよいだろう。彼には、相手のいろいろな徴候から、相手が自分の目つきに何かを感じ、妙に落ち着かなくなっているのがはっきりわかる。自分の目つきのおかしさは、もう相互の間で何ら秘密ではない。その点で自分と相手は無限に接近し、心理的に一つであるといえる。しかしそれほど相互の間で公然のことながら、病者の方から目つきのことは絶対に言葉に出して言うことはできない。むしろ無言のうちに同じ心理を共有すればするほど、口に出して言うことはできなくなる。これは、ある意味では、両者の境界が取り払われ、一つになりながら、そこに絶対的な隔たりがあるということである。ところでこの隔たりこそ実は、本来自己と他者との間にある隔たりである。この隔たりは言葉を介してのみ取り払われる。いや隔たりは本来あるべきもので、言葉によって橋が懸かけられるというべきかもしれない。ともかくもし病者が、相互がみつめているものを口に出し

て言ったら、息詰まるような緊張した関係は破られるであろう。しかし彼は手前で引き返す。少くとも口に出さなければ、相手には自分の心を究極のところでは不透明のままにしておくことができると思うからか。それなら彼は自身、言葉による以外の他人の心の不可知性を信じていることになる。それなのに他者に侵入し侵入されうろと思っているのは、矛盾しているのではないか。結局のところ病者が他者と思っているのは、真の他者ではない何かであるということである。それが何であるかは措くとして、真の他者ではないから、たとえ病者が他者にみられ、思われる自分を気にするといっても、他者に実際に指摘された自分を自分とするというのとは異なる。そのような従順さあるいは客観性は、病者とは無縁であろう。よく対人恐怖者の弱気の反面の心性として指摘される負けず嫌いとか強がり、むしろ他人の言葉を受けつけまいとさせるであろう。実際病者は自分についての頑固なイメージを保持しているものである。症状一つをとっても、例えば自己視線恐怖者は、自己の視線の異様さとそれの他者への悪影響を確信している。赤面恐怖者は、ある状況で必ず赤面する自分を確信している。その他性格的なことでも病者は、「本当の自分」を保持している。ここで我々は、なぜ病者は自分自身について確信に近いイメージをもちながら、他者にみられ、思われる自分にとらわれるかという問題に逢着する。単に見栄が働いているのだろうか。だが病者は、他人によくみられれば、それでよしとするのではない。よくみられれば、本当の自分はそうではないのに、と彼は自分に帰るのである。自分自身が抱いている「本当の自分」と他人にみられる自分との間の往復運動の中で少しも心の安まる時がないというのが事の真相であろう。

先の問題には、所謂自己受容の問題が絡んでいる。自分だけが「本当の自分」を確信しており、それを他者から隠そうとするのが、自己受容といえるだろうか。他者と自己を分かちあえ

ない自己受容など考えられない。いやそもそも病者が信じこんでいる「本当の自分」は、自分といえるべきもののなのだろうか。自分が自分について唯一人で考える時、自分を如何ようにもしうる危険性があるだろう。神経症者について、その自我理想（理想自己）の高さがいわれるが、反面の低い現実自己像の非現実性をもいわねばならない。どちらも真の自己から離れている。このような idealized self と despised self との間の動揺 (Horney 1966) は、自己が「自己以外のものに出会う」(木村 1972) ことがない限り、避けられない運命にあるのであろう。ともかく病者においては、自己が真の自己でなく、他者にも真に触れていないと言わなければならない。どこにも手応えを感じることができないというのが、彼の根本の問題であろう。病者は自己を主張しようとするかもしれないが、その自己を信ずることができない。足元が不安なために、何かに依拠しようとして他者に赴くが、その不安の故に他者に触れる瞬間に恐怖し、引き返す。恐怖の故に彼は自分の内に閉じこもり、さらに不安定な自己を得る。そして他者と触れる瞬間の恐怖もより大きくなる。対人恐怖症にはこうした悪循環が想像されるのである。自己主張される自己は、密室で形成される自己であり、その限り「場違い」のもののだが、それを河合 (1975) のように西洋的な自我と考えるべきかは疑問である。

さて最後に対人恐怖症の重度のものと軽度のものとの間の違いに触れておかなければならないが、これまでみてきた、自己に対する恣意、他者を侵し侵されること、他者を信じられないことなどの、それぞれ互いに切り離せないもののいずれもの度の強まりが、前者については認められるということを言うておくにとどめよう。(博士課程大学院生)

注1 この症例は京都大学教育学部心理教育相談室の大学院生青木健二氏の提供によるものである。注を借りて深謝の意を表させていただく。

鈴木：対人恐怖症における対自と対他

文 献

- 土居健郎 1960「自分」と「甘え」の精神病理 精神神経学雑誌 62巻1号 149—162
- Frankl, V. E. (宮本・小田訳) 神経症 I 1972 みすず書房
- Horney, K. 1966 Our Inner Conflicts Morton.
- 石福恒雄 1964 一赤面恐怖者の研究 精神医学 6巻1号 33—39
- Jung, C. G. (河合・藤縄・出井訳) ユング自伝 I 1972 みすず書房
- 笠原・藤縄他 1972 正視恐怖・体臭恐怖 医学書院
- 河合準雄 1975 自我・羞恥・恐怖 思想 62号 76—91
- 木村 敏 1972 人と人との間 弘文堂
- 近藤章久 1970 対人恐怖症について 精神医学 12巻5号 22—28
- 三好郁夫 1970 対人恐怖症について 精神医学 12巻5号 29—34
- 西園昌久 1956 赤面恐怖症の精神分析 精神分析研究 Vol. III, No. 7, 8, 11—14
- 柴田 出 1975 視線の克服 河野心理
- 鈴木謙次 1959 赤面恐怖症の研究 精神分析研究 Vol. VI, No. 6
- 鈴木睦夫 1973 神経症様状態にあった一女性の事例 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 第1号 94—100
- 鏑幹八郎 1974 自我同一性の危機の様態に関する臨床心理学的考察 広島大学教育学部紀要 第1部 第23号 329—342
- 内沼幸雄 1974 対人恐怖症における愛と倫理 (その1) 精神医学 16巻1号 19—29
- 山下 格 1970 対人恐怖について 精神医学 12巻5号 5—14